

〈図画工作〉

図画工作科における見方・感じ方を広げる児童の育成

——造形的な視点の学習とヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ(VTS)の活用を通して
(第3学年)——

那覇市立城東小学校教諭 玻名城 千 夏

I テーマ設定の理由

『小学校学習指導要領解説図画工作科編』（平成29年7月、以下『解説図工編』）では、鑑賞活動において、自ら働きかける能動的な鑑賞活動や言語活動が重要視されている。第3学年及び第4学年の「B鑑賞」では「自ら働きかけながら見付けたよさや面白さを、児童自身が気付くようにすることが大切である。」とし、「どのように感じたのか、思ったのかの根拠や理由を形や色などを基に話したり、適切な人数で話し合ったり、気持ちを振り返って書いたりするなど、児童自身が気付きを自覚できるような指導の工夫が考えられる」と明記されている。その中で、「児童の気付きや感じ方が自然に広がるようにすること」「教師と児童の対話だけではなく、児童同士の対話につなげること」が重要であると示されている。

これまでの自身の授業実践を振り返ると、表現と鑑賞を多少連動させてはいたものの、表現に比べ鑑賞は指導方法が曖昧であり、児童作品の鑑賞場面では、がんばったことの発表だけで終わらせてしまうことが多かった。児童は鑑賞の授業に対し受動的で語彙も少なく、造形的な視点からの表現や交流があまりみられず、他の児童の発表を聞いて見方や感じ方を広げることが少なかった。このような実態から、表現と鑑賞を連動させ、児童が造形的な視点で、自分や友達の作品の良さを感じられる鑑賞活動の工夫や、活動を振り返る場面、様々な形態の対話により、自分なりの見方・感じ方を広げる学習計画が必要であったと感じている。

本学級の児童の事前アンケートによると、これまで、生活の中で、色や形といった造形的な視点に特に意識を向ける場面は少なかったようである。また、自分の思ったことや感じたことを発表したり、伝え合ったりすることに対して消極的な様子もみられた。

そこで本研究では、表現及び鑑賞の活動を効果的に連動させ、図画工作科の知識であり、見方・感じ方を広げるための基礎と考えられる造形的な視点の学習と、対話を介しグループで作品をみる鑑賞教育プログラム、ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ(以下 VTS)を活用した鑑賞活動の工夫を行っていきたい。表現及び鑑賞活動が連動する場では、伝え合うことが苦手な児童への手立てとして、対話が自然に生まれる題材の設定や、児童の見方・感じ方が自然に広がっていきけるような活動計画を立てていく。VTSの活用では、造形的な視点を基に、児童から作品をみての様々な思いや感じたことを引き出していきたい。その中で、児童は根拠を基に自分の思いや感じたことを伝えたり、友達の見方・感じ方を聴いたりすることでひとつの作品に様々な見方・感じ方があることに気づき、自分自身の新たな視点や発見が生まれ、自分なりの見方・感じ方が広がるのではないかと考える。

このように、表現及び鑑賞活動を連動させた学習計画で、造形的な視点を持ち、VTSを活用した鑑賞活動を取り入れることで、児童は鑑賞活動に能動的になり、自分なりの見方・感じ方が広げられるであろうと考え本テーマを設定した。

〈研究仮説〉

表現及び鑑賞活動が連動する場において、造形的な視点の学習とVTSを活用することで、見方・感じ方を広げられる児童の育成につながるであろう。

II 研究内容

1 見方・感じ方を広げることと造形的な視点

(1) 見方・感じ方を広げるとは

『解説図工編』によると、自分の見方や感じ方を広げたりするとは、「作品をつくったり見たりするときなどに、よさや面白さなどを感じ取ったり味わったりし、自分の見方や感じ方を広げ、自分なりに対象や事象を味わうことができるようにすることである。」と明記されている。これをもとに、本研究における、児童が見方・感じ方を広げていく姿を、3段階に分けて捉えることとする（図1）。

図画工作において、作品のよさや面白さを感じ取ったり味わったりするためには、造形的な視点が基礎となり、見方・感じ方が広がっていく。これまで意識することのなかった色や形に意識を向け、自分の見方・感じ方に気づく段階が①である。②では①を基に、友達作品などから、見方・感じ方に気づいたり共感したりする段階である。友達などの作品を見る際に、漠然と作品をみたり「すごい」「きれい」という言葉で表したりするのではなく、見る視点を明確に持ち、思いの根拠を示しながら交流することで、友達の見方・感じ方に共感できるであろうと考える。③では、児童の見方・感じ方が広がった姿として、これまで自分の中にはなかった新たな価値に気付く段階である。新たな価値とは、色や形に対する見方・感じ方が自分の中で広がっていることに気付いたり、作品の良さや面白さなどを感じ取ったり味わったりし、鑑賞の良さに気付くことであるとする。

よって、見方・感じ方が広がった児童の姿とは、材料や作品など（以下、『対象』とする）に対し、造形的な視点を基に、これまで自分の中にはなかった新たな価値に気付いた姿であるとする。

検証は、①は造形的な視点が身についたか、②は主に、友達作品を鑑賞し自分の見方・感じ方を伝えることができたか、③は、これまでの学習をもとに新たな価値に児童自身が気付くことができたかを見取っていく。見取りの方法は、児童の振り返りカードやアンケート、授業観察を通し行っていく。

(2) 造形的な視点とは（図2）

『解説図工編』において造形的な視点は「図画工作科ならではの視点であり、図画工作科で育成を目指す資質・能力を支えるものである。」「一人一人が感性や想像力を働かせて様々なことを感じ取ったり、考えたりし、自分なりに理解したり、何かを作り出したりするときなどに必用となる物である。」と明記されており、児童の見方・感じ方を広げていく際の図画工作科における、知識と捉えられる。

造形的な視点とは『解説図工編』によると、「具体的には『形や色など』、『形や色などの感じ』、『形や色などの造形的な特徴』などであり、学習活動により様々な内容が考えられる。」とあり、「形や色などとは、形や色、線や面、動きや奥行きなどの対象の造形的な特徴のことである。」と明記されている。発達段階別にみると、形や色などが自分の感覚や行為を通して、いろいろあることに気付くことが低学年、感じがわかることが中学年、造形的な特徴を理解することが高学年とある。本研究の対象である第3学年の児童は、『解説図工編』において、形や色などについては、その感じや色の明るさなどもわかるようになるよう示されており、この時期、自分の考えやイメージを具体的に持つようになる。例えば、形の柔らかさ、色の暖かさ、色の組み合わせにより「三角形は鋭い感じ」「赤い色は元気な感じ」「鋭い感じにしたかったから三角にした」「青色と水色なので、

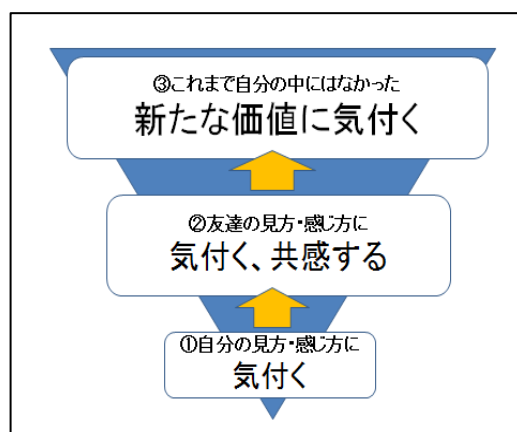


図1 児童が見方・感じ方を広げていく姿

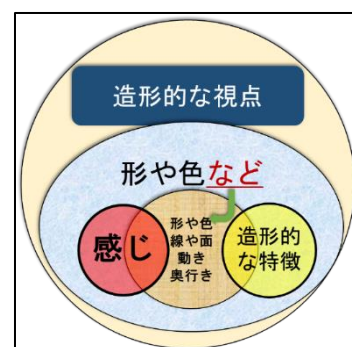


図2 造形的な視点

冷たい水みたいだと思った」など、考えと理由、事実と気持ちなどを関係付けるようになる。

よって、本研究では対象が第3学年であることから「造形的な視点」を『解説 図工編』に示されているとおり、形や色などの感じであるとする。また、造形的な視点が身についた児童とは、造形的な視点をもとに、「対象」を鑑賞できる姿であるとする。

2 ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー(VTS)の活用

VTSは、ニューヨーク近代美術館MOMAの教育部長であったフィリップ・ヤノウインが開発した、対話を介してグループで作品をみる鑑賞教育プログラムである。

VTSの概要は、教師は作品画像を用いて、学習者が主体的に発見を積み重ねていけるように促す。その際、教師はファシリテーターというコミュニケーションの整理役に徹する。(図3)そして、児童が、見る・考える・話す・聴くという4つのプロセスを踏みながら、表1にある児童ができるようになることを促していく。

このプロセスをふみ、オープンエンドな3つの発問(表2)を順に繰り返し行うことで、様々な意見を引き出すことができ、お互いの意見を話したり聴いたりする中で、見方・感じ方が広がっていくと考える。

教師は始めに、「作品の中で見つけたこと、気づいたこと、考えたこと、疑問でも何でもいいので話していきましょう。」と

投げかけ、児童に30秒程度じっくり絵をみるよう促す。鈴木有紀(2019)によると「作品の中で見付けたことを何でも挙げてみよう、と投げ掛けることが、それぞれが見た物や、感じたこと、抱いたイメージをためらいなく口にする

ことを可能にします。」とある。この発問により、鑑賞経験の少ない児童も感じたことを言葉にしやすくなり、より能動的な鑑賞活動へ繋げられると考える。2つ目の「どこからそう思う?」という発問は、思ったことや感じたこと、考えたことの根拠を聞く問いであり、論理的思考を促す問いである。鈴木(2019)は「この問いによって、子ども達は事実に基づいて論理的に意見を述べる力を自然に養っていくことができます。」と述べている。言語がすべての表現及び鑑賞活動につながる唯一のツールではないが、自分の思いや感じたことを言葉にし、根拠を基に伝えられる力を育むことは他教科同様、図画工作科においても重要であると考え。また、VTSでは「なぜそう思ったの?」ではなく、「どこからそう思ったの?」と問うことで、根拠を作品の中の具体的などこかを指し示せば良いため、児童は根拠が簡単に示せるようになる。最後の「他には(もっと発見は)ありますか?」の問いは、ひとつの議論が終わったときや他への視点へ導きたい時に有効であり、他の児童の新たな見方・感じ方を促す質問になると考える。

児童は鑑賞の経験が少ないため、自分だけの狭い見方・感じ方だけにとどまってしまう傾向がある。作品の良さや美しさを感じ取るという鑑賞の楽しさにあまりふれたことがない児童にとって、VTSによるグループ鑑賞で、根拠をもとに、自分の思いを伝えたり、友達の意見を聞いたりすることが、自分なりの見方・感じ方を広げていくことに有効な手立てではないかと考え、鑑賞活動にVTSの手法を取り入れ検証を進めていく。

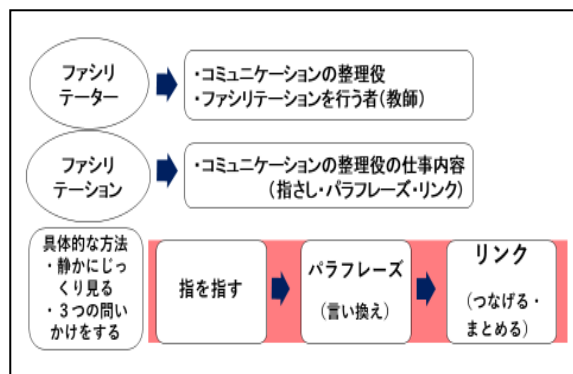


図3 VTSにおけるファシリテーターとファシリテーション

表1 子どもたちができるように促すこと・つけたい力

プロセス	できるように促すこと	つけたい力
見る	作品をよく見る	じっくり見る力
考える	見たものについて考える。 (意見の根拠を示す)	論理的思考力
話す	観察した物事について発言する。	考えたこと、感じたことを言語化し話す力
聴く	他の人の意見をよく聴いて考える。(新たな視点を得る)	聴く力

表2 オープンエンドな3つの発問

- 1「この絵の中に何が見えますか?
(絵の中で何が起きているのでしょうか?)」
- 2「どこからそう思う?」
- 3「他には(もっと発見は)ありますか?」

3 表現及び鑑賞活動の連動を図る工夫

児童の表現及び鑑賞活動とは本来連動し、補い合っているものである。『解説図工編』の教科の目標である「表現及び鑑賞の活動」の解説で「表現と鑑賞はそれぞれに独立して働くものではなく、互いに働きかけたり働きかけられたりしながら、一体的に補い合って高まっていく活動である。」と明記されている。本研究でも、見方・感じ方を広げる児童の育成に鑑賞及び表現活動の連動は必要であると考え、2つの活動が連動した学習計画を立てていく。

例えば、造形的な視点の学習を行う際児童が形や色に対し興味を持つことから学習は始まる。興味を持たなければ、形や色に対し何かを感じるという新たな造形的な視点を身につけることは難しい。自分なりの意味や価値をそこに見いだせたとき、児童は今までの自分の中にはなかった新しい視点として、造形的な視点を身につけ、見方・感じ方が広がっていくと考えられる。児童に、形や色に対し自然に興味を持たせ、見方・感じ方が広げられるような学習になるためには、造形的な視点である色や形を材料とした表現活動を行い、使用した材料で学習を進めたり、児童が製作した作品で鑑賞活動を行ったりする表現及び鑑賞活動の連動が効果的であると考えた。

そこで本研究では、1つの題材の中に表現及び鑑賞活動を連動させた指導計画を立てた。児童が好きな表現活動を取り入れ、その表現活動で制作した作品をもとに鑑賞活動へとつなげていく。

学習計画としては、「色や形って面白い」の題材でシンプルな作品を作り、自分の見方・感じ方に気付くための造形的な視点を学ぶ学習を取り入れる。次に、「つながる作品」では、次時の鑑賞活動に参加しやすく、自分の思いを伝えやすい場として、グループで対話を通し作品を製作する場と、友達の見方・感じ方に気付き共感する「いいねカード」の場を設定する。最後にシャガールの「私と村」を鑑賞し、これまでに自分の中にはなかった新たな価値に気付き見方・感じ方を広げていく。

Ⅲ 指導の実際

1 題材名 「色や形っておもしろい」「つながる作品」「新しい自分の発見」

2 目標

- 色や形に対し、自分なりの見方・感じ方を身につけることができる。
- 美術作品の造形的なよさや面白さなどについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方・感じ方を広げることができる。

3 評価規準

(1) 知識及び技能	(2) 思考力, 判断力, 表現力	(3) 学びに向かう力, 人間性
・色や形に対し、自分なりの見方・感じ方を身につけることができる。(造形的な視点) ・絵に表す表現活動を通して、感じたこと想像したこと、見たことから表したいことを見付けることができる。	・色や形に対する見方・感じ方の自分の中の広がりにつづくことができる。 ・美術作品の造形的なよさや面白さなどについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方・感じ方を広げることができる。	・進んで表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などと関わるができる。

4 指導計画と評価計画 (全10時間) *VTS (ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ)

	目標	学習活動	活動	教師の支援	主な評価規準 【観点】(評価方法)
1 2 検証	色や形に対し、自分なりの見方・感じ方を身につけることができる。	題材1:「色や形っておもしろい」色 ①授業の約束を確認する。 ②自分の作品を作る(ビー玉アート) ③色に意識を向ける ④めあて「色をかんじよう!」 ⑤色に対するイメージや気持ちを表現する。(作品を使用) ⑥まとめ ⑦振り返り(「色」という言葉を使用)	表現 鑑賞	・児童が安心して発表できる雰囲気を作り約束提示を行う。 ・電子黒板を効果的に使用する。 ・自分なりのイメージを持てる発問をする。 ・授業の始めと終わりの違いに目をむけさせ、造形的な視点の中の「色」を意識するまとめをする。	【知識及び技能】 色や形に対し、自分なりの見方・感じ方を身につけることができる。(造形的な視点) (・発言・行動観察・振り返りシート)
3 4	 ビー玉アート	形 ①丸い形から、はさみを一度だけ入れて作品を作る。 ②形に意識を向ける ③めあて「形をかんじよう!」 ④形に対するイメージや感じを発表	表現	・普段何気なく見ている形を意識できる発問をする。 ・前時の学習を生かし、色と形を組み合わせ、造形的な視点を基にイメージをまとめられる工夫をする。	*カンディンスキーの「コンポジションⅧ」を授業の前後に鑑賞し違いを見取る。

		する（白い○△□→色つき○△□） ⑤作品の題名当てクイズをする ⑥今日の学習でこれまでと見方や感じ方の変ったところをワークシートに書く。	鑑賞	・2時間の学習で色と形で初めて意識したこと、これから意識して見てみたいことが記入できるよう声をかける。		丸い形から
5 6 7 8	・絵の一部分を繋ぎ、一つの作品をグループで完成させることができる。 ・友達の作品の良さに気付くことができ、共感することができる。（いいねカード）	題材2：「つながる作品」 ①造形的な視点をふり返る。 ②シャガールの「私と村」の一部を切り取った4枚の絵を鑑賞し、思ったことや感じたことを発表する。（VTS） ③制作に入る前の約束をする。 ④グループで4枚の絵から、絵の続きを想像し、1枚の作品を仕上げる。（えんぴつ→色つけ→マジック→題名つけ） ⑤自分が担当した部分について皆の前で思いを発表する。（全8グループ） ⑥他の7つのグループの作品に、付箋紙にいいなと思うことを書き貼りつける。（いいねカード） ⑦振り返りシートにつながる作品で気がついたことやいいねカードを貼ってもらった感想を書く。	鑑賞 表現 鑑賞	・前回のワークシートから児童が広げた造形的視点について伝える。造形的な視点が意識できるよう掲示物なども工夫する。 ・作者や作品名は伝えない。 ・こちらから主題を伝えることはせず、グループで作品を作る際のイメージが共有できる程度の鑑賞とする。 ・発表は皆の前で行う。作品を描いているときに楽しかったことや対話したことなどを発表することを伝える。 ・「いいねカード」には自分が思ったこと、感じたこと、いいねと思ったことを記入させる。	【学びに向かう力、人間性】進んで表現したり鑑賞したりする活動に取り組み、つくりだす喜びを味わうとともに、形や色などに関わることができる。（・発言・行動観察・振り返りシート） 	つながる作品製作途中
9 10 検証 まとめ	・造形的な視点やこれまでの学習をもとに作品を鑑賞し、自分の見方・感じ方を広げることができる。	題材3：「新しい自分の発見！」 ①シャガールの「私と村」を鑑賞する。（VTS） ②「私と村」の作品をもとにこれまでの学習を振り返る。（色と形、白黒の絵、つながる作品） ③「私と村」の作品にグループで題名を考え、その根拠も発表する。 ④これまでの学習のまとめをする。 ⑤新しい自分の発見を発表する。	鑑賞 表現	・児童が作成した作品と比べるのではなく様々な作品を受容できるように働きかける。 ・前回までのワークシートから児童が広げた造形的視点を皆で共有し児童の言葉でまとめを行う。 ・これまでの学習をふり返り新たな自分との出会いに視点を持ち振り返りを行う。	【思考力、判断力、表現力】 ・色や形に対する見方・感じ方の自分の広がりにつづくことができる。（・発言・行動観察・振り返りシート）	

5 検証授業 「新しい自分の発見」（9～10／10時間）

(1) 目標：造形的な視点やこれまでの学習をもとに作品を鑑賞し、見方・感じ方を広げることができる。

(2) 本時の展開

	学 習 活 動	* 指導上の留意点 ◆評価 【観点】（方法）
導入 5分	1. めあての確認 ①絵をじっくりみて、みたこと思ったこと感じたことを発表しよう。 ②新しい自分を発見しよう。 2. 鑑賞の学習の約束等の確認 ・鑑賞とは ・鑑賞で使うところの確認（目、耳、鼻、心、頭、手）	* 児童は電子黒板の前にいすを持ち電子黒板を囲むように半円に座る。本時で使用するこれまでの学習で児童がグループで作成したシートを黒板に貼っておく。 * これまでの学習で確認しているので簡単に行う。 * 言葉に困ったら先生やみんなが助けると伝える。
展開 70分	3. シャガールの「私と村」を VTS で鑑賞する。（20分） 児童の発言内容一例 寒い国か暖かい国かで児童の意見が分かれ、造形的な視点や根拠をもとに発表した内容 ここは寒い国だと思う。（理由：おじさんの服装が長袖で暖かそう。馬の顔に青い部分があり、寒くて凍りそうな感じがする。右上で雪が降っている。右上の部分にオーロラがあるから。男の人が歩いている道は白から雪道だと思う。右の男の人は寒すぎて顔が緑色になった。おじさんが持っている道具は雪かきの道具	VTS の3つの発問 ①「この絵の中に何がみえる？」 ②「どこからそう思いましたか？」 ③「もっと発見はありますか？」 * 作品名や作者名は伝えない。 児：「寒い国だと思う」 教：「どこから寒いと感じるの？」 児：馬の顔の青が寒くて凍りそうな感じがするのと男の人の隣の女の人のスカートの色が寒くて固まりそう。」 教：「あなたにとって、この色はなんで固まりそうで寒そうなの？」 児：「氷のイメージがある。」 * 児（児童） 他の児童：「おーなるほど」 * 教（教師）
	4. 「私と村」の作品をもとに、これまでの学習を振り返る。 (1) 色→形→線→全体 (2) 白黒の絵 (4枚の部分絵の鑑賞の振り返り) (3) つながる作品 A グループのつながる作品 題名：ジャマイカ人の行動 この題名にしたわけ：ジャマイカ人がピザを食べながら馬に人参をあげている。そして、昔を思い出している。	* 後半の作品の題名と根拠の発表へとつなげる。 (1) 色→使われている色を聞く。気になる部分の色の感じを発表する。どうしてこの人の顔の色は緑色に塗ったのか考えさせる。形→真ん中の丸い形について（なくてもいいのではないか、△ではどうか）線→ロバと人をつないでいる目線について。全体→全体の感じ印象 (2) つながる作品の、白黒の4枚の部分絵を振り返り、色の鮮やかさなどを意識させる。 (3) つながる作品作りの振り返り。シャガールの作品と自分たちの作品を比べるのではなく、どこ

	～つながる作品 児童の振り返りカードより～ ・つなげたらすごい絵になったから人の絵とつなげるのが楽しくなった。 ・かいている途中にいろんな絵が浮かんできて楽しかった。 ・いいねカードで褒めたり褒められたりして心が気持ちよかった。	らも素晴らしい作品であることを伝える。 ◆【鑑賞の能力】（発言・行動観察・振り返りシート）・美術作品の造形的なよさや面白さなどについて、感じ取ったり考えたりし、自分の見方・感じ方を広げることができる。
振り返り 15分	5. 「私と村」の作品名をグループで考え根拠とともに発表する。 ・これまでの学習と、今日の学習からでてきたイメージを基に作品の題名作りと根拠を画用紙に記入し発表する。  題名：ふしぎな町 この題名にしたわけ： ・家や人が反対になっているから ・人の家が緑色になっているから ・赤や白が交わっているから ・下の方に黒色のような花火のような物があるから。 6. まとめる・振り返る ・これまでの学習を振り返り新しい自分の発見を発表する。 ・学習を振り返り発表する。その後振り返りカードを記入する。	～児童の振り返りカードより～ ・人にはいろいろな感じ方があって、いろいろな物を見ていたら、おもしろくなってきた！(H) ・鑑賞のお勉強で同じ絵から見えるものは一つだけじゃなく人によって色々な物が見えてくる。(T) ・絵の中に何かの形とか寒い感じとか暑い感じとか全然分からなかったけど授業で感じがわかって、考えるようになって、とても嬉しかったです。 ・児童からでてきた言葉で、これまで毎時間とっていた授業後の振り返りカードの児童の言葉を使い振り返りを行う。(パワーポイント) ・教師のまとめ

6 仮説の検証

本研究では、「表現及び鑑賞活動が連動する場において、造形的な視点の学習と VTS を活用することで、見方・感じ方を広げられる児童の育成につながるであろう」とし、研究を進めてきた。検証方法として、アンケートや振り返りカード、児童の活動の様子を用いて児童の変容を考察する。

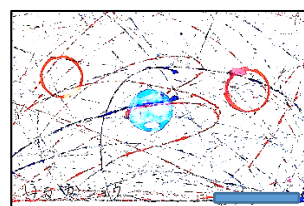


図3 ビー玉アート

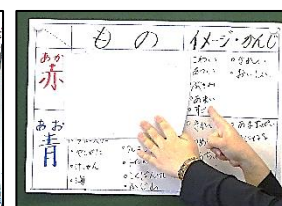


図4 造形的な視点の学習

(1) 自分の見方・感じ方に気付くことができたか

題材1で「ビー玉アート」(図3)(タイトル: いるかショウ)の表現活動の後、色を感じる造形的な視点の授業を行った。(図4)検証授業後は色から、味や温度、感情などを感じられるようになっていた。(表3)

検証授業前後に、色と形と線が印象的なカンディンスキーの「コンポジション VIII」の作品をみせ、児童に自由記述で感じたことなどを書いてもらった。その中から、造形的な視点で書かれた記述を見取った。(図5)色と形と線の3つの視点から記述した児童は検証前後で29ポイント増えた。検証前、図5では、なしの7%のグループにいた児童が、検証後は、形と線の48%のグループになるなどの大きな変容がみられた児童もいた。検証後は、色・形・線以外の造形的な視点(奥行き、動きなど)に着目する児童も出てきており、視点の広がりを感じさせ始めた。児童Aは(図6)、検証前、造形的な視点から作品をみており、検証後はさらに色や形から受ける感じが書けるようになった。形については「形は形によってきけんとか安全とかわかった(道路標識や危険を示す案内板など)」と形の特徴が生活の中に生かされていることにも気がつき、全体の場で発表した児童がいた時、驚きの声をあげた児童が多かった。

表3 児童の色の感じ方

	赤色	黄色	青色
味	・あまい ・からい ・しょっぱい ・あまずっぱい	・すっぱい ・にがい ・あまい	・あまずっぱい ・おいしい (ブルーベリー)
温度	・あつい		・寒い ・冷たい
明るさ	・明るい ・まぶしい	・明るい ・まぶしい	・明るい ・まぶしい
見た目	・きれい ・不気味	・きれい ・カッコいい ・かわいい	・きれい ・カッコいい ・美しい
感情	・こわい	・すごい	・気持ちいい ・悲しい ・怖い
その他	・力強い ・すごい ・まるい ・強い・1組 ・花の色 ・燃える ・太陽・丸い ・マグマ ・力持ち ・おいしそう	・痛い ・長い ・堅い ・大きい ・うすい ・2組 ・ビリビリ ・恋 ・ぴかぴか	・鮮やか ・強い ・楽しい ・癒やされる ・平和 ・3組・など ・みずみずしい ・さわやか ・ふわふわ ・いっぱい

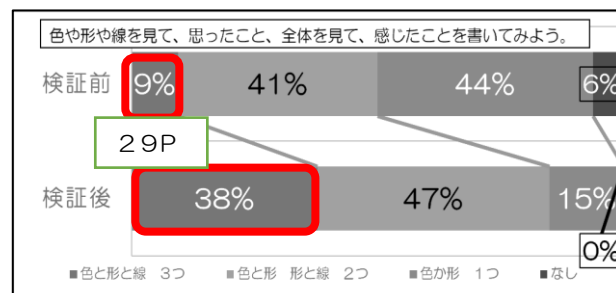


図5 造形的な視点からの作品鑑賞 (N=32)

これらのことから、児童は造形的な視点の学習で、色や形を意識し、自分の見方・感じ方に少しずつ気付き始めたのではないかと考えられる。

色については児童が身近な物として造形的な視点でとらえやすく、表現活動の時にも、積極的に活用していたが、形については、感じが広がりにくく、捉えが難しそうな児童もいた。今後は、日常でも形を意識させる声かけや、形により意識を向けられる題材の工夫が必要だと考える。

- (2) 友達の見方・感じ方に気付き共感することができたか。

題材2の「つながる作品」の製作後他のグループの作品をみて、造形的な視点から友達の見方の良さに気づいたり、見方・感じ方に共感したりする「いいねカード（付箋紙）」を貼る鑑賞活動を行った。（図7）一人あたり7枚の予定が、平均約10枚の付箋紙を記入し、貼り付けることができた。同じ題材でも、見方・感じ方の違いにより、全く違う作品ができることに気がついた児童は「僕たちのグループと違う考えがあってももしろかった」「私ならこんな色を使わないのですごくと思った」と根拠を基に自分の思いを振り返った。（図8）付箋紙には、「馬の色が美しい」「ユニコーンの色が紫色でかわいくていいね」などの色への感情、「パイナップルの形のウォータースライダーが面白い。楽しそう」等の形の面白さを交えての感想や共感があった。次々に付箋紙の追加をもらいに来る児童は作品鑑賞をして、あふれる自分の思いを伝えたいという嬉しそうな表情がみられた。いいねカードを読み「みんな一つひとつのつながる作品をちゃんと見てくれているんだな」「カードを読みまたやりたいと思った」と振り返った。32人中31人が他のグループの作品を見て思いや感じたことを友達へ伝えることができ、残り一人の児童は教師との会話で自分の思いを話す事ができた。どの鑑賞活動も造形的な視点から児童の見方・感じ方の広がりにつなげられるよう、作品鑑賞の視点を明確に持たせ活動したため、思いを伝える言葉に造形的な視点が入り、これまでの端的な言葉での表現内容から具体的な表現に変わっていった。（図8）

これらのことや、(1)の検証、図8の振り返りから、児童は自分や友達の見方・感じ方に気付いたり共感したりし、造形的な視点が身につき始めているのではないかと考えられる。今後も能動的な鑑賞活動へ繋げるため、明確な視点を持たせ、児童作品やそれぞれの造形的な視点を大切にする学習活動に取り組む必要があると考える。

- (3) 児童の見方・感じ方の広がりについてVTSの活用は有効であったか

本研究におけるVTSの活用と効果の大まかな内容を表4にまとめた。また、VTS活用により①根拠をもとに自分の思いを伝えられたか、②友人の意見に耳を傾けることでこれまでとは違う意見が浮かび自分なりに見方・感じ方を広げることへ繋がれたかについて検証する。

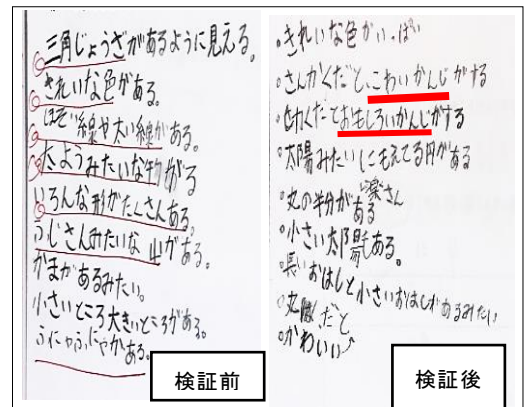


図6 造形的な視点からの作品鑑賞（児童A）

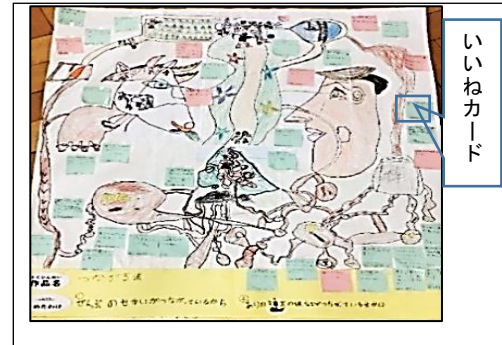


図7 いいねカードが貼られた作品

- ① 僕たちのグループ、しちがうが、いいねカードがあつておもしろかった。
- ② わたしなら、こんな色をつかわないの、ですごくいいと思った！
- ③ あい、うみだ、たのしさが伝、たわたしあ、だりい、なと、か、ん、じ、ま、し、た。
- ④ カラフルな色や、おもしろい、か、す、ご、い、と、思、っ、た。
- ⑤ さんたちのグループの、男の人、の、上、に、う、み、だ、い、な、も、の、か、の、で、い、て、ら、て、お、い、ア、イ、ア、ン、だ、と、思、っ、た。
- ⑥ 土、也、図、記、号、が、使、わ、れ、て、い、る、グ、ル、ー、プ、が、い、ま、す、ご、う、た、た、カラフルな、糸、会、を、見、て、お、も、し、ろ、い、と、思、っ、た。
- ⑦ か、い、る、作、品、を、見、て、人、の、顔、の、色、が、糸、系、色、だ、う、た、の、で、か、ら、あ、る、た、な、あ、ー、と、思、い、ま、し、た。人、間、の、と、な、り、に、い、る、馬、の、色、も、ほ、う、せ、き、の、よ、う、な、色、な、の、あ、す、ご、い、な、あ、ー、と、思、い、ま、し、た。家、の、色、も、か、ら、あ、る、で、き、れ、い、だ、な、あ、ー、と、思、い、ま、し、た。こ、れ、の、よ、う、に、な、つ、た、こ、と、は、な、い、と、思、い、ま、し、た。
- ⑧ 友、だ、ち、の、作、品、や、色、や、キ、タ、を、み、て、図、エ、が、す、ぎ、に、な、り、ま、し、た。

図8 友達の見方・感じ方に気付く・共感する

表4 本研究におけるVTSの活用と効果

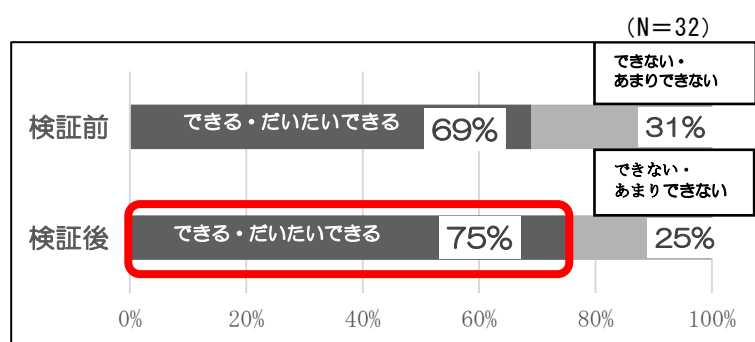
	第1時～4時（表現→鑑賞）	第5時～第8時（鑑賞→表現→鑑賞）	第9時～10時（鑑賞→表現）
題材名	題材1 「色や形っておもしろい」	題材2 「つながる作品」	題材3 「新しい自分の発見！」
主な目標	色や形に対し、自分なりの見方や感じ方を広げることができる。（造形的な視点）	自分が担当した絵を造形的な視点も交え思いを共有することができる。	造形的な視点やこれまでの学習をもとに見方・感じ方を広げることができる。
活用場面	作品を皆の前で発表。聞いている児童から「私は～感じがしました」や、題名当てクイズで。	「私と村」を、4つの場面に切り分け、全体イメージの共有の場面で一枚ずつ鑑賞	シャガールの作品「私と村」を鑑賞する場面。
鑑賞作品	児童作品ビー玉アート・丸い形から	シャガールの作品「私と村」 4枚の部分絵（白黒）	シャガールの作品「私と村」 （フルカラー）
教師と児童の対話一例 *VTSの基本発問（表2参照） *パラフレーズ *児＝児童 教＝教師			
	児：「Aさんの作品の題名はゆりかごだと思うよ。」 教：「ゆりかごだと思ったんだね。どこからそう思ったの？教えてくれる？」 児：「ほら、ここの丸いところ。赤ちゃんがここに入っているような感じがする。」 教：「なるほどねー」 「他にもゆりかごだと思った人はいますか？」 「はい、Bさん。どこからそう思うのかな？」 児：「ゆりかごに似ているベビーカーに見える。」 教：「どこがベビーカーだと思う？」 児：「ここが、赤ちゃんを隠す屋根みたいな物で・・・」 教：「なるほどね。ここがベビーカーの屋根の丸い形に見えるのね。」	児：「この男の人はこれから自分の畑に行くんだと思う。」 教：「どこからそう思ったの？」 児：「この持っている道具でこれから畑に行って小麦を刈ろうとしている。畑はここらへんにあって・・・」 教：「なるほどねー。この道具は小麦を刈り取るための農具なのね。Aさんは、この絵にはない、こっち側の部分に畑があるって考えたのかな？」（児：「そう」）おもしろいねー。もっと聞かせて。」 児：「そしてね、その小麦でパンを焼いてこっちのパン屋さんで売るのが。」 教：「なるほど！この建物はパン屋さんで、そのために小麦を育てているんだね。家並みにはパン屋さんもあるんだ。面白くなってきたね。他にこの男の人に関連する意見はありますか？」	教：「今日はこの絵を鑑賞するよ。ルールはいつもと同じだよ。30秒だまって、じっと見てね。よく絵をみてね。しゃべりたくなくても我慢してね。」 教：「はい、では、この絵の中に何が見えませんか？はい、Aさん。」 児：「これ、世界の反対の場所にみえる。だって、あつちは夜だけどこっちは昼みたいだから世界が違うんじゃないの？」 教：「なるほど、Cさんどこらへんが昼だと思うの？さしてみて」 児：「だってさ、ここは青がちよっと見えているから、晴れていると思うから・・・」 教：「なるほど。今日は曇っているけれどちよっと青空みえるもんね。」
活用効果	これまでは「〇〇だと思う」等の感想だけの発表で終わっていたが「どこからそう思う」という根拠を問うことで自分の意見の裏付けを始めた。意見と根拠を関連づけた論理的思考を促す効果を感じた。	「なぜそう思うの？」ではなく「どこからそう思うの？」と聞くことで児童は根拠を伝えやすくなっている。「どこ」は指で指すだけで簡単に根拠が示される。それが児童の内側の言葉を引き出す鍵となっているのではないだろうか。	「どこからそう思う？」と問い続けたことで児童は自ら根拠を述べ始めた。さらに、自分が発表したことにしる更なる根拠も考え始めた。これは他の児童らにもみられた。また、自信を持ち発表できる児童が増えてきた。（児童のアンケートより）根拠をもとに自分の意見を述べることは論理的思考力をつけることにも繋がると感じた。
学習後の児童の振り返りより（VTSによりついた力 表1と*右下参照） ・友達の絵をみると、いろいろ見えてきた。（A） ・今までより、もっと考えるようになった。（B） ・鑑賞のお勉強は感想が言えて、説明がしやすいから好き。（B） ・みんなと考えてわけとかを言うと、勇気がでて楽しい。（C） ・発表は苦手だったけど感じ方は無限にあって間違いはないって言ったから好きになった。（C） ・みんなで絵の良いところや教え合ったり話し合うから、鑑賞の勉強が大好き。（C） ・いろいろ考えるようになったし、自分の意見も友達の意見も聞けるようになったし、言えるようになった。（D） ・言うといろいろな友達が意見を言って、ああだなとか思い浮かぶ。（E） ・みんな感じ方が今まで同じだと思っていたけどみんな感じ方が違うとわかった。（E） ・みんな意見が違ってみんなの意見が繋がっていった。（E）			
*VTSによりついた力 A：じっくりみる力 B：論理的思考 C：話す力 D：論理的思考力、聴く力、話す力 E：感じ方の広がり			



① 根拠をもとに思いや感じたことを伝えられたか

アンケートによると、「芸術作品をみて感じたことなどを言葉で伝えることができる・だいたいできる」が、検証前の69%から75%へと6ポイント増えた(表5)。しかし、検証前後であまり差がみられなかったため、「できない・あまりできない」と答えた児童へ聞き取りを行った。児童は検証前「上手」「面白い」という漠然とした感想を感じたことを伝えられることとと思っていたが、検証後は、造形的な視点や根拠を基に伝えたりすることが当たり前となった為、感じたことを伝える難易度が上がり、根拠をうまく言葉で言えない時があると答えていた。他にも発表が嫌い、恥ずかしいという意見があった。

表5 芸術作品をみて感じた事などを言葉で伝えられるか



しかし、児童観察では、VTSによる鑑賞の場において、思いを発表した児童には、教師が「どこからそう思った?」と問い続けたため、場所の指さしでの発表も含め、全員が根拠を述べることができた。表4の教師と児童の対話一例に見られるように、最後の検証では、教師が問わなくても自ら根拠を述べる児童もいた。また、VTSを活用した鑑賞活動の中で、一度も発表できなかった児童とは休み時間に個別に思いを聞き、その根拠を尋ねると答えることができ、どの児童にも思いがあり、根拠も伝えられることが確認できた。

今後は発表が苦手な児童には更なる支持的風土作りと、根拠に自信のない児童の発表には「今のが根拠だよ」と教師が伝え、児童が根拠を述べられている自信をつける必要性を感じた。

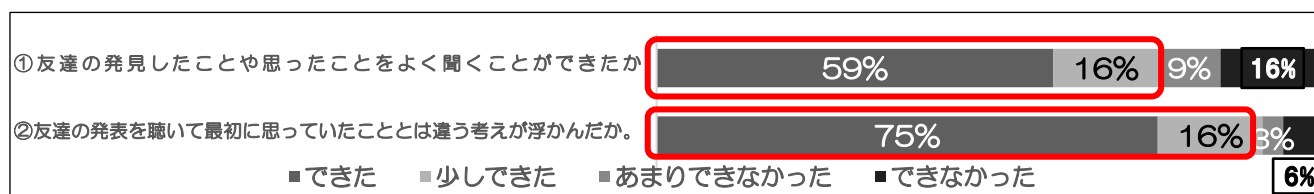
② 友人の意見に耳を傾け、これまでとは違う意見が浮かんだか

表6のアンケートによると①が「できた・少しできた」児童が75%であった。②では「浮かんだ・少し浮かんだ」児童が91%であった。これは友達の発表をよく聞き、納得したり、自分の意見との違いを考えたりしながら、新たな考えが浮かんだからだと考えられる。

鑑賞活動中、全く反対の意見が出る場面があった。作品の中は暑い国か寒い国か(検証授業展開参照)、人物は男性か女性かという意見である。「この人は男の人だと思う。だってね・・・」という児童Aの意見に刺激され、全員がそのことについて考え始めた。意見が分かれている間、何度か全員に挙手で自分の意見を示してもらった。その中で、友達の発言により考えが変わったり、自分の意見を肯定したりしながら根拠とともに自分の意見を発表する姿がみられた。初めは男性が少なく女性が多かったが最後の場面では逆転していた。休み時間は友人らと鑑賞を続け男性でも女性でもないという新たな視点を出す児童もいた。

これはVTSによる鑑賞の良さであり、一人の鑑賞ではうまれない視点であった。「これからも思ったことや感じたことをみんなで話しながら作品を鑑賞したいか」(題材2)のアンケートでは全員がやりたいと答え、「絵の良さを見つけることが楽しい」「楽しいし、感情をいっぱい出せるから鑑賞が好き」と振り返った。これらのことから、児童は根拠をもとに自分の思いを伝えたり友達の意見を聞いたりすることで、鑑賞経験の少なさによる自分だけの狭い見方・感じ方から、自分なりに視点を広げられ鑑賞の楽しさを感じられたのではないかと考える。

表6 友人の意見に耳を傾け、これまでとは違う意見が浮かんだか (N=32)



(4) 見方・感じ方の広げることができたか

題材1の造形的な視点の学習で、色や形の自分の見方・感じ方に気がついた児童は、題材2の「いいねカード」の活動により、自分とは違う友達の見方・感じ方に気付き、共感していった(図9、図10)。造形的な視点から友達の作品を鑑賞したり、自分の作品への新たな価値に気付いたりする姿もみられた。(図11) 題材3では芸術作品を鑑賞し、作品鑑賞の楽しさを共有した。授業後のアンケートでは90%以上の児童が造形的な視点からの鑑賞を肯定的に捉えたが(図12) 題材2のアンケートでは全員がこれからも皆で鑑賞したいと答えていた。これは、鑑賞作品の違いと考えられ3年生の児童にとって自分達で制作した作品の方が、より鑑賞の楽しさへ繋がったと思われる。

児童が見方・感じ方を広げる段階の③新たな価値に気付く学習では、鑑賞の楽しさや良さ、色や形を感じることができる造形的な視点、それぞれの感じ方の違いを認める共感する姿勢など、全員が自分の中の新しい見方・感じ方に自分で気付き振り返ることができた(表7)。

このように、題材1の造形的な視点の学習から出発した児童は表現及び鑑賞が連動した場において、制作やV T Sの活用により造形的な視点を少しずつ増やし、これまで自分の中にはなかった新たな価値に気づき自分なりの見方・感じ方を広げていったのではないかと考える。

以上のことから表現及び鑑賞活動の連動の場において造形的な視点の学習とV T Sの活用が児童の見方・感じ方を広げることに有効であったのではないかと考える。

IV 成果と課題

1 成果

- (1) 表現及び鑑賞活動を連動させたことで、児童が自分の作品の色や形に興味を持ち、造形的な視点を身につけることができた。
- (2) 鑑賞活動にV T Sを活用し、根拠をもとに思いや感じたことを伝えたことで、友達の意見や自分自身の生活経験、感じ方から鑑賞の視点が広がり、児童自身の見方・感じ方を広げることができた。
- (3) 自分や友達の見方・感じ方に気付き、共感していったことで、造形的な視点をもとに新たな価値に気付く事ができ、児童の見方・感じ方を広げることができた。

2 課題

- (1) 鑑賞で広げた見方・感じ方を次の題材へ繋げる計画的な学習計画の作成。
- (2) 色や形を含め、日常でも造形的視点を意識させる声かけや、題材の工夫。
- (3) 発表をためらう児童が自然に言葉を出したくなるファシリテーション力を向上。

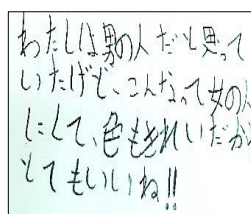


図9 共感したカード



図10 共感する姿

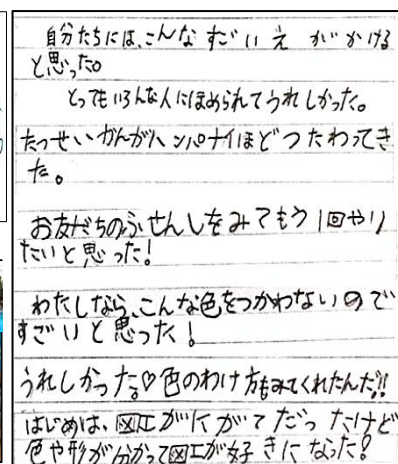


図11 振り返りカードより

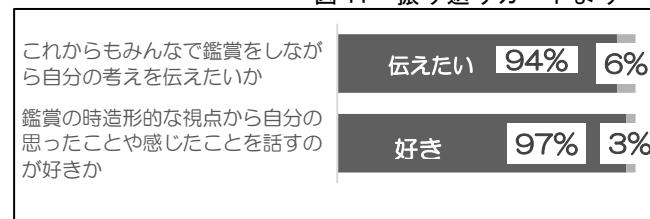


図12 鑑賞活動アンケート結果 (N=32)

表7 新たな価値に気付いた姿

- ・絵をかんじられたりできて、新しい自分、できたと思います。
- ・絵をみて友達に話ができるようになった。・絵をみるのが楽しくなった。
- ・前は何かを感じることができなかったけどできるようになった。
- ・緑色から苦い味においを感じられるようになった。・自分の感じ方がわかった。
- ・図工をはじめて、いろいろなことが感じられるようになりました。さいしょはあんまり色や形を感じてなかったから、色や形を感じられるようになってうれしかった。
- ・今まではあまり色や形に興味をもっていなかったけど授業で色や形に興味を持った。
- ・形を考える自分になった。色を考える自分になった。
- ・形や色を先生と勉強する前と(今は)ぜんぜんちがう。・今日の新しい自分はいろんなことが感じられること、発表が得意になった。
- ・絵や色をみて自然の色がいっぱいなんだなあとわかりました。
- ・話し合ったり、伝えたりするのが楽しくできた。
- ・友達の作品や色や形をみて、図工が好きになりました。
- ・みんな感じ方が今まで同じだと思ったけど、みんな感じ方が違うとわかった。

〈参考文献〉

- 鈴木有紀 2019 『教えない授業 美術館発、「正解のない問い」に挑む力の育て方 英治出版』
- 岡田京子 2018 『世界一わかりやすい 会話形式で学ぶ図画工作科の授業作り 明治図書』
- 宮崎 龍次 2017年 「小学校への出前授業を通じた図工に親しむ素地づくり」『ART in EDUCATION 教育美術 No. 903 9月』 8頁
- 文部科学省 『小学校学習指導要領（平成29年度告示）解説 図画工作編』 平成29年7月
- 阿部宏行 編著 2017 『平成29年度 小学校 新学習指導要領ポイント総整理 図画工作』 東洋館出版社
- 岡田京子 2017 『成長する授業 子供と教師をつなぐ図画工作』 東洋館出版社
- 仲嶺盛之・北川智久・笠雷太著 2017 『手軽でカンタン！子どもが夢中になる！筑波の図画工作 指導アイデア&題材ネタ50』 明治図書
- フィリップ・ヤノウィン著 2015 『京都造形芸術大学アート・コミュニケーション研究センター訳 どこからそう思う？学力を伸ばす美術鑑賞 ヴィジュアル・シンキング・ストラテジーズ』 淡交社
- 上野行一 2011 『私の中の自由な美術 鑑賞教育で育む力』 光村図書
- 上野行一 高村高明 2008 『mite! DVD BOOK モナリザは怒っている！？ 鑑賞する子どものまなざし』 淡交社
- アメリカ・アレナス著 2005 『mite! ティチャーズキット1（小学校3・4年生）』 淡交社
- アメリカ・アレナス著 木下哲夫訳 1999 『人はなぜ傑作に夢中になるの モナリザからゲルニカまで』 淡交社
- 結城昌子 構成・文 1995 『小学館あーとブック⑦シャガールの絵本 空にふわり』

〈参考WEBサイト〉

国立教育施策研究所 特定の課題に関する調査報告書（図画工作）（最終閲覧：2019年7月）

https://www.nier.go.jp/kaihatsu/tokutei_zukou/houkoku_zentai_001.pdf

学び！と美術（最終閲覧：2019年7月）

<https://www.nichibun-g.co.jp/data/web-magazine/manabito/art/>

福岡市教育センター平成29年度研究紀要（最終閲覧：2019年7月）

<http://www.fuku-c.ed.jp/center/report/tyousa/h29/index.htm>

対児童の対話一例にあるように、回を重ねるにつれ、見えない部分の絵を想像し、絵の中に自分なりの物語を作り、その物語を絵の中の根拠を基に話す児童も出てきた。そして、思いを伝えやすい場の工夫として、各題材の中にペアやグループ、全体での対話の場を設定した。

中でも、「つながる作品」は、4人で絵をつなげて描いていくグループ活動であり児童の対話が活発になった。「つながる作品」は4枚の部分絵をVTSで鑑賞後、部分絵を貼り付けた模造紙に、4人で絵をつなげて描いていった。

(図7)それぞれの絵が誰かとぶつかる場面や、つぶやきから児童の対話が自然に生まれ、お互いの世界が混ざり合う作品が完成した。アンケートによると、「対話をしながら作品を完成させた」と答えた児童が9割を超えた。あるグループでは、一人の児童のつぶやきから、4人がその児童の絵に集まり、そこで対話が始まった。(図8)「これを描いたらもっ

図8 4人が集まり話思いを伝えながら描く様子



と面白くなるよね。」「私ここに学校を描いていい?」「ここには明るい色をぬるね。」と4人がそれぞれ意見を出し、自分の描きたいものを決め、自分の担当部分をこえ、全員で描きたいところやアイデアが浮かんだところから絵を仕上げていくグループが8グループ中6グループあった。これは予想をこえた児童の行動で、さらに対話が生まれやすくなった場であった。一人のつぶやきに皆が反応し、お互いのアイデアを出し合い、良さを認め合う中で、自分の意見が出しやすく、対話が生まれやすくなったと考えられる。

対話が生まれるには土台作りが重要となってくる。児童が対話をしやすい対話的な場の雰囲気作りの他に、対話の材料も必用であると考え、制作の前に、VTSによる鑑賞を取り入れた。その結果、88%の児童が鑑賞後に描きたいことがイメージできたと答えている。休み時間には黒板に貼られた図7の絵に集まり、多くの児童が自分のイメージや、友達との会話を楽しんでいた。また、85%の児童が、造形的な視点をもとに対話したり考えたりしてつながる作品を描いた、と答えていることから、前時の学習も生かし、対話をしていたことがわかる。最後の検証の振り返りでは、全員が対話的活動の場での制作活動は楽しかった、またやりたい、と答え、98%の児童が自分の考えを伝えられる鑑賞の学習をこれからもやってみたいと答えた。表9は、検証前後で、言葉で思いを伝えられるかどうかをみたものである。数値的にはあまり差が無いが、内容をみると、検証前は「上手だね」「色の塗り方が丁寧だね」という漠然とした感想で伝えられると答えていたが、検証後は、造形的な視点から、より具体的に相手の作品の良さを伝えられるようになっている。(図8)この付箋紙はお互いの作品をみて、良いところを具体的に伝えたものである。

どの児童も学習前より、記述内容は増えていた。形を算数学習と結びつけていた児童（正三角形、長方形など）「つながる作品」の題材で社会科の地図記号を作品の中で表現したりするなど（図6）、児童は学習の中で自然と他教科との横断を図り自分の表現活動へと生かしていた。児童もそれに気づいており「おー社会とつながった！」というつぶやきが聴かれた。その他では、「色や形の学習で初めて分かったことや感じたことがあったか」の項目で全員が、「あった」と答えた。生活の中での造形的な視点の意識の変化では32名中31名が、検証後は生活の中の色や形を面白いと思うと答えた。

これらの内容から、児童は造形的な特徴に着目し、視点を増やし、学習や対話的活動を通し、自分なりの新しい視点が生まれ、見方・感じ方を広げることができたと考ええる。

① 児童は自分の思いや感じたことを言葉にすることができたか。

思いを伝えやすい場の工夫として、各題材の中にペアやグループ、全体での対話の場を設定した。

中でも、「つながる作品」は、4人で絵をつなげて描いていくグループ活動であり児童の対話が活発になった。「つながる作品」は4枚の部分絵をVTSで鑑賞後、部分絵を貼り付けた模造紙に、4人で絵をつなげて描いていった。（図7）それぞれの絵が誰かとぶつかる場面や、つぶやきから児童の対話が自然に生まれ、お互いの世界が混ざり合う作品が完成した。アンケートによると、「対話をしながら作品を完成させた」と答えた児童が9割を超えた。

あるグループでは、一人の児童のつぶやきから、4人がその児童の絵に集まり、そこで対話が始まった。（図8）「これを描いたらもっと面白くなるよね。」「私ここに学校を描いていい？」「ここには明るい色をぬるね。」と4人がそれぞれ意見を出し、自分の描きたいものを決め、自分の担当部分をこえ、全員で描きたいところやアイディアが浮かんだところから絵を仕上げていくグループが8グループ中6グループあった。これは予想をこえた児童の行動で、さらに対話が生まれやすくなった場であった。一人のつぶやきに皆が反応し、お互いのアイディアを出し合い、良さを認め合う中で、自分の意見が出しやすく、対話が生まれやすくなったと考えられる。

対話が生まれるには土台作りが重要となってくる。児童が対話をしやすい対話的な場の雰囲気作りの他に、対話の材料も必用であると考え、制作の前に、VTSによる鑑賞を取り入れた。その結果、88%の児童が鑑賞後に描きたいことがイメージできたと答えている。休み時間には黒板に貼られた図7の絵に集まり、多くの児童が自分のイメージや、友達との会話を楽しんでいた。また、85%の児童が、造形的な視点をもとに対話したり考えたりしてつながる作品を描いた、と答えていることから、前時の学習も生かし、対話をしていたことがわかる。最後の検証の振り返りでは、全員が対話的活動の場での制作活動は楽しかった、またやりたい、と答え、98%の児童が自分の考えを伝えられる鑑賞の学習をこれからもやってみたいと答えた。表9は、検証前後で、言葉で思いを伝えられるかどうかをみたものである。数値的にはあまり差が無いが、内容をみると、検証前は「上手だね」「色の塗り方が丁寧だね」



造紙

という漠感想で伝と答えて検証後は、



然としたえられるいたが、造形的なえられるの作品を

視点から、より具体的に相手の作品の良さを伝ようになっていく。（図8）この付箋紙はお互いみて、良いところを具体的に伝えたものである。1人7枚の付箋紙の予定が、児童が具体的に伝ようになってきたため、結局一人15枚以上の付箋紙を記入していた。思いを伝えたこと、伝えられたことに喜びを感じ自分達の作品に自信を持ち始める児童や、自己肯定感が上がった児童もいた。（図9）

えられる

以上ことから、VTS の活用により、対話的な活動の場において、自分の思いや考えを言葉で伝えることができるようになり今後の対話的な活動の場も楽しみにしていると考えられる。

② 根拠を基に伝えることができたか

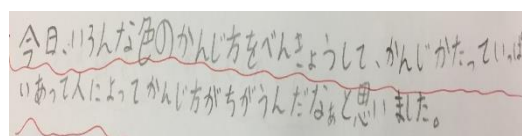
検証授業の中で VTS の基本的な発問②（表 2）「どこからそう思ったの？」を、機会を見つけては使い、児童の発言に対し根拠を求めてきた。言葉にすることで思いを明確にする事と、自分の発言に自信を持ってもらうことを意図していた。最初は困っている児童もいたが、「指をさすだけでいいよ」と伝えると「ここ」と指を指すことから始め、この問いになれてくると、全員が根拠を持ち伝えられるようになっていった。教師の問いに、絵に差し棒を使いながら根拠を説明したり、自分の使える言葉を適切に使い、言葉で場所を示し根拠を伝えたりする児童、表 8 教師対児童の対話一例にあるように、回を重ねるにつれ、見えない部分の絵を想像し、絵の中に自分なりの物語を作り、その物語を絵の中の根拠を基に話す児童も出てきた。そして、最後の検証では、教師が問わなくても自ら根拠を述べる児童もいた。

アンケートでは、「鑑賞学習で、造形的な視点から思ったことや感じたことを伝えることが好きか」の問いに、91%の児童が好きと答え、表 8 学習後の児童のアンケートのつけたい力（論理的思考）の記述からも、根拠を述べることを楽しんでいる様子が伺える。

これらのことから、児童は、VTS の活用により、自分の思いや感じたことを、根拠を基に伝える力がついたと考えられる。

③ 友人の意見に耳を傾け、違う視点に気付くことができたか

VTSでは、よく聴くことも促す。その中で友達の意見を聴きながら自分の意見と混ぜ合わせ、新たな自分なりの見方・感じ方を作り出していく。鑑賞学習では同じ絵を見ながら全く反対の意見や別の意見が出ることがある。今回の検証では、この絵は暑い国か寒い国（検証授業展開参照）か、絵の中の人が男性か女性かで意見が分かれた。（図10上）その意見が出ている間、何度か挙手で全員に意見を聴くと、根拠のある友達の発言



により、新しい自分なりの意見ができ、その新しい意見に自分なりの根拠を考え始めた。また、絵の中の動物を「魚、牛、馬、ロバ」と様々な見方をし、それらの意見をグループ対話へ持ち込み、意見をまとめ、制作へと取りかかった。友達の発表を聴いて、78%の児童が違う考えや意見が浮かんだと答えた。自分とは違う意見がでてでも相手を否定せず、その意見もいよいねと認められながら進む鑑賞の学習で、児童は自分の意見も出しやすく、相手の意見も受け入れやすかったように思う。（図10下）検証中、相手を否定する発表は一度も出なかった。表7表8の児童アンケートや、最後の検証で97%の児童がこれまでとは違う見方・感じ方の広がった新しい自分を発見できたことも含め、VTS の活用により、友人の意見に耳を傾け、その根拠に対し納得すると、相手の意見も認めながら、新しい自分の視点に気付くことができたと言える。

図 10 違う意見も認められる視点

以上のことから、対話的活動の場において言語活動の工夫として取り入れた VTS の活用は、造形的な視点から自分なりの見方・感じ方を広げる児童の育成に有効であったと考える。

IV 成果と課題

1 成果

(1)VTSを活用したことで、教師が答えを教える学習ではなく、児童が主体的に自分なりの答えを見つけ出し、感性や想像力を使う主体的な学習となった。

(2)造形的な視点の学習を最初に取り入れたことで児童はその後の学習や振り返りでは常に図画工作科の知識である造形的な視点を意識するようになってきた。それが生活の中へも広がり始め、生活の中で色や形や作品を楽しむ児童が増えてきた。

2 課題

(1)児童の更なる語彙力や見方・感じ方を深める為の教師のファシリテーション能力を高めたい。